

社会科実践記録

「野麦峠を越えた人々」

I 単元の位置づけ

「野麦峠を越えた人々」は、「農民のくらしと近代工業」という単元の学習の部分に属する。これは、明治に入って急速に近代工業が発展していった背景に大量の貧しい小作農民層が、労働の供給源として存在していたことを理解させるねらいを持っている。

また、部落問題学習の視点から見れば、解放令以後の部落の暮らしを考える上での基礎となる学習だと考えている。解放令以後も部落差別が残っていたのはなぜか。それは、基本的には飛騨の小作農民とつながる問題である。社会の最底辺におかれたまま、なんら実質的な救済の措置もない形だけの平等化は、単に自由な労働力の供給源としての意味しかもたなかった。つまり、明治以後も差別を解消していくための実質的な力は持ち得なかったのである。

そういう見通しの中にこの「野麦峠を越えた人々」の学習は位置づいている。

II 学習指導案

6年1組 社会科学学習指導案

11月22日(火) 第3校時

指導者 上野 芳樹

1 単元名 「農民のくらしと近代工業」

2 本時の題材 「野麦峠を越えた人々」

3 題材分析

明治維新によって近代国家としての歩みを始めた日本は、欧米の先進国からの文明を積極的に取り入れて急速に成長していく。そうした日本の近代化を押し進めるには、巨額の外貨が元手として必要だった。電信・電話、汽車や汽船、外国人技師への俸給、日清・日露戦争のための軍需品や軍艦など莫大な資金が必要だったのである。その資金は何によって得られたのだろうか。

明治時代の日本の輸出製品の中心は生糸であった。生糸は、原料・技術のすべてが自給できたから、外貨獲得効率100%である。資源に恵まれない日本にとって生糸は外貨獲得のドル箱であった。生糸関係商品は、明治初年の貿易品の60%以上を占め、日本の産業が急速に発展する明治末期から大正・昭和の初めにかけても、生糸は日本輸出総額の三分の一をくぐることはなかった。日

本の近代化はまさに生糸によって支えられたといってもよい。

生糸生産では、イタリア・中国という先進国のライバルがいた。外国との競争に勝ち抜くためには、安くて品質のよい製品を作らねばならない。まだ、機械化の遅れていた日本では、低賃金・長時間労働という、極端に労働者を酷使する方法によって、コストダウン

を図ってきた。信州岡谷の製糸工場へ働きに出た飛驒の工女の悲劇もそういう状況の中で生まれたのであった。

初めて糸ひきに出るシンコ（新工）は、まだ、11・2才のまだ幼い子供だった。朝の5時から夜の9時まで1日15～16時間も長時間労働。作業場は、むっとするさなぎの悪臭。室内の温度は、まゆを煮るかまの蒸気で40度近くにも上がり、着ている服はびしょびしょになった。作業場ごとに品質競争があり、成績の悪い工女には罰金がかげられた。1年間働いても持ち帰る金がないどころか、借金をかかえて帰る工女も四人に一人の割合でいたという。工場の寄宿には嚴重に鉄のサンがはめられていて、逃げた工女があれば、監視員によってたちまちつかまって引き戻された。また、もどらない場合は、契約違反ということで実家から契約金の10倍以上の金額を取られるのであった。過酷な労働によって結核などの病気になり、死亡する者、あるいは、過酷な労働に耐えられず自殺する者もかなりの数にのぼっている。

しかし、注目すべきは、現代の我々には想像を絶するような過酷な労働に従事した工女たちのほとんどが、糸ひきの仕事への不平・不満を持っていないことである。食事についても、低賃金についても、長時間労働についても、苦しかったと答えた者はたった3%だけで、後の大部分は「それでも家の仕事よりも楽だった」という。つまり、工女として働きに出ていた飛驒の貧農の生活の状況は、工場の労働より更に劣悪な状況にあったということである。明治時代は一部の肥大化する地主と大量の貧しい小作農を生み出した時代であった。このころの水呑百姓は「四分六分」で地主に年貢を納めさせられ、残ったくず米を食べていた。地主はそのうえ金を貸して抵当流れに田地をただのように取り上げていた。山の木を切り焼き畑をつくりヒエやアワをつくるが、それでも一年食べるほどはなく、けわしい山に木材を背負い、雪の中で炭を焼き、ワラビ根掘って夜なべにわらび粉をとってヒエとかえる。そういう仕事を朝暗いうちから十時、十一時までも夜なべをしなければそのヒエ飯にさえありつけないというのが飛驒の貧農の実態であった。工女たちが工場勤めに対して不平・不満をもたなかったのは当然のことだと言える。

この飛驒の工女に典型的に見られるように、日本の社会の底辺に生きる無数の貧農層の存在が、安価で使い捨ての効く労働力の供給源となっていたのである。そして、こうした社会構造の最底辺に未解放部落の人々が置かれていたのであった。

4 この単元の指導計画

- ・野麦峠を越えた人々 …… 1時間
- ・足尾銅山と田中正造 …… 1時間

5 本時の目標

明治維新からわずか40年あまりで、生糸の生産高・輸出高が世界一となるほどに日本の生糸産業が発展したのは、低賃金・過酷な職場環境での長時間労働にも不平を言わないほどに貧しい小作農が労働力の供給源として大量に存在していたからであることを理解する。

6 展開案

--	--	--

学習活動（教師の働きかけ）	予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>・明治時代の最も重要な産業は何だろうか （生糸であることを教える）</p> <p>◎生糸の生産はどんな人がどんなふうにして行っていたか見てみよう。</p> <p>・ビデオ「野麦峠」（部分） ・労働時間・賃金などの表</p> <p>◎みんなはこれを見てどんな感想を持っただろうか</p> <p>◎働いていた工女たちはどう思っていただろうか （資料）「工女の意識調査」</p> <p>◎どうして工女たちはこんなひどい仕事に対して不満を持たなかったのだろうか</p> <p>◎当時の小作農の状況を知る （資料集P70）</p> <p>◎生糸工場は特別だったのだ</p>	<p>・織物・瀬戸物・絹織物</p> <p>・かわいそう・大変だ ・ひどいことをさせるなあ ・自分たちならとってものがまんできかない ・どうして会社はこんなひどいことをしたのだろうか。 ・工女たちは何も言わないでがまんしていたのだろうか。</p> <p>・えーっ ・うそみたい</p> <p>・家の生活はもっとひどかったんじゃないか</p> <p>どんな工場も似たようなものだろう</p>	<p>・簡単に予想を聞いてみる ・明治初年の輸出のようすを表すグラフの提示 ・明治42年には世界一の生産額であったことも説明する。</p> <p>・感想の中には疑問も出てくるだろう。それが、次の課題に自然に発展していけるとよいのだが。</p> <p>過酷な労働は、少しでも安い製品を作る必要があったからであることはこの話合いの中で確認する。</p> <p>・子どもたちは意外に思うだろう。それが次への課題になる。</p> <p>工場の労働を不満とは思わないほどに苦しい生活状況があったことをわからせる。</p>

ろうか ・工女の話 ・炭坑労働者のようす		これが当時の一般的な産業構造だったことをおさえてまとめとする。
----------------------------	--	---------------------------------

III 授業記録

T 今日は、工業の勉強をします。最初に、みんなが今までの勉強で疑問に思ったこと。黒板見てください。江戸時代から、明治に入って、外国のいろんな技術を取り入れて文明開化がおり、そして、わずか30年ほどで、中国とか、ロシアといった大きな国と戦う、この間がわずか30年。勇也だったかな。「先生、なんで、ほのくらいで、そんなに強くなれたん？」て疑問持ってたね。今日は、それを勉強します。

わずか、30年ほどで、中国やロシアに負けないほど強くなった秘密をこれからみんなに見せます。何だと思いませんか。

(生糸の実物を見せる)

C s オーツ。

T これ、何だか知ってる？

大輔 蚕！

勇也 頭の毛

T みんな、よう知ってるね。そう、これは、蚕の糸、

勇也 ああ、福原先生とこでこうてるやつか？

T そうそう、金森先生が4年生でこうてやったね。あの蚕から取れた糸。何ていうの？

力 生糸

T そう、生糸って言います。

生糸って何に使うか知ってる？

力 そう。着物でもうんと上等な、高級な着物。

そういう物の材料になるんだね。実は、この生糸と、30年で日本が外国に負けんほど強くなったことと関係があるんです。

だれか、ピンと来る人ある？

真人 服とか作って売ったんちがう？

真ひと 生糸を工場で作って、その工場で作った生糸をじゃんじゃん外国に売った。そのもうけたお金でいろんなものを買った。

T 今、真ひとがぼそぼそ言うところわかる？

力 わかった。

真人 これを工場でいっぱい作ってそんで、外国に売って、もうけて、それで。

力 まあ、言うたらな、金もうけ、というか、商売でな。それを工場で作って売るやん。ほんなら

お金が入ってくるやん。そのお金で外国の武器とか買うの。勇也 ほの、生糸を売って、自分の戦う道具とか買うの。鉄砲とか。

T つまり、明治に入って外国より100年遅れている。おいつくためには、いろんな文化や技術を外国から学ぶ必要がありますね。それ、ただでできますか？

C できない。

和幸 大量のお金がいる。

T どんなことにお金がかかる？

和幸 機械とか、

T 機械は日本で作れないよね。ほうすると、外国から買わんならん。戦争とかいうけど、軍艦とか作れたの？

C 作れへん。他の国から買う。

カ イギリスとかアメリカとかから買わんならん。

T ほうすると、それを買うためには、莫大な金があるね。そのお金は、いったいどこから出てきたのか

みんなは、生糸を売ってもうけたお金じゃないかというわけね

じゃ、資料を見てください。それが、当たっているかどうか

(OHPで提示「生糸の輸出額の変化」)

どう、すごいでしょ。この統計によると、明治42年には、日本から輸出している生糸の額は、1億3300万円。(C ワアッ)

これ、だんとつに世界一です。

カ 一気に落ちてるところもあるで。

T うん。変動はあるけど、明治の初めから比べるとぐんぐん伸びていってますね。

つまり、日本の生糸は、ものすごくよく世界で売れたんですね。

カ それだけ、日本の生糸は良いの？

T そういうことやね。

で、何で、日本にとってこの生糸がいいのか、そのわけわかる？なぜ、日本はそんなに生糸に力を入れたのか。

C ……

T 原料は、何？

C 蚕のまゆ

T 蚕のまゆやね。暢子

暢子 蚕はいっぱいいるし、えさもある。

T そうね。蚕に食わせる桑のはっぱもあるね。

C お金があまりいらん。

T もし、鉄なんかだったら、原料の鉄は日本にないね。(C お金でかわんならん) 原料を外国から輸入してきて、加工せんならんいうと、(C 高い) お金が高くつくね。ところが、生糸は、原料がまるまる日本で作れるわけね。だから、これが、売れば売れるほど、まるもうけできるわけね。

智士 ほれ、日本だけしか作れんの？

T 日本だけじゃない。日本の他にも作っているんだけど、
(OHPで、資料提示)

C 日本が一番多い。

T じゃ、そこで問題。どうして、イタリアや中国でも作っているのに、日本の生糸がそんなによく売れたんだろうか。

智士 製品がいい。

T それを今日は考えます。じゃ、それを考えるために、

まず、最初にこの生糸は、明治のころ、どこで、だれが、どんなふうに作っているのか、というのをこれから、見てもらいます。

これは、映画の「野麦峠」という映画を編集したものです。ほんとは、2時間ぐらいのものを10分にまとめたので、無理なところがありますが見てください。

(VTR視聴)

大輔 生糸とかで、働いている人は、病気とかになったり、死んでる人がいるのに表ではあそんでいる人がいる。

T そのところをもう少ししていねいに考えてみたいんですが。
働いている人たちのことを工女といいます。一番最初に働きに出た人のことをシンコといいます。いくつぐらいだか、知っていますか。

C 13 14

T ちょうどみんなと同じ年ぐらいなんです。小学校を卒業したぐらい。

今、みんなテレビを見ていて、感じたり、疑問に思ったりしたことがあると思うんです。それをノートに簡単にいいですから、書いてください。1分ぐらいで。

C (ノートに感想を書く)

T 加藤、ちょっと出して見て。

和幸 お金持ちの人は、踊ったりして楽しそうにやってるけど、その裏では、工女たちが、一生懸命働いていて、倒れたりしてかわいそう。

カ ほんまに薬とか、やってるの？薬代とか、働いてへんでお金やらんとか言うてたけど。

T 大してしてくれなかったね。先生の調べたところでは、体がむくんでくるとヒルに血を吸わせたり、そんなこともしたそうです。はい、弘子出して。

弘子 お金持ちの人は、楽しく踊ったりしているのに、工女のひとは、休み時間も十分になくて、かわいそう。

T 休み時間も十分でない、て言いましたね。あれ、何時間ぐらい働いているか知ってる？

C 12時間

T 最初ポーと鳴ったね。あれが、4時。(ホウーツ)

そして、晩が、7時か8時。ひどいときは、9時、10時まで働いた。

その間、休憩とかは、いっさいなし。ごはん食べる時の10分だけ。

はい、菜穂子。

菜穂子 お金持ちの人は、楽しく踊って、楽しく暮らしているけど、工女の人は一生懸命休む間もなく働いているから、大変。

幸則 日本が世界で一番生産が上がったのも、こんなに苦勞して働いている人がいたからだということがわかった。

T 今、大事なこといわったね。わかった？ もういっぺん言って。

幸則 日本が生糸の生産が世界一になったのは、この人たちがこんなに苦勞して働いている人たちがいたからだということがわかった。

T わかった？

力 うん。日本を強くしたのは、この女の人たち。

T なぜ、日本が世界一になれたのか。

和幸 工女が休むひまなく働いたから。

智士 あのかな、つらいめしてな、外国に輸出したから。

T つまり、日本には競争相手があったのね。この生糸を買ってくれるのは、どこかという、全てアメリカだったの。アメリカは、自分の国で生糸が作れないから、原料の生糸は、全て外国から輸入していたの。

その時に競争相手が、日本・イタリア・中国と、3つあったの。

その競争相手のイタリアにも中国にも勝ったんです。それはどうしてかという、

力 工女が寝る暇もなく働いたから。

T うん、そうすると、なんでいいの

真ひ 安い生糸がたくさん作れる。

T 寝る間もおしんで作れば、たくさん作れるね。ほうすると。

真ひ それを、安く売ったらな、安いほうを買う

力 いっぱい作ったら、安く売れる。

少しやったら、安く売ったらもったいないけど、たくさんやったら、やすう売ったら、それだけアメリカも喜ぶ。

T 日本は、初め、質の良さではイタリアに負けていた。そして、値段では中国に負けていた。

それが、今見たような状況の中で大量に作れるようになってきた。それから、徹底した検査をやってね。基準に合わない糸を引いた工女から罰金をとって、良い糸を引いた人にお金をほうびとしてやる。そんなことをして糸の質もどんどんよくなって、それで、さっき幸則がいったように世界一の生糸になったわけですね。

はい、もう少し聞いていきましょう。晃典

晃典 ぼくも、お金持ちの人とかは、楽しい目してるのに、工女の人たちは一生懸命働かされてかわいそう。

裕幸 工女の人とかは、かわいそうやなあ。

T はい、じゃ、今まで出た以外の感想や疑問を持った人ありませんか？

美希 疑問やけど、なんか、病気になったり、死んだりするのに、工場の人は、何で、ほっとくの？

T ああ、だれか、そこ言える？ずいぶんつめたかったでしょ。病気になったりしても、ろくに手当でもしないで、小屋にほりこんでおいたり、金にぎらせて追い出す。どうして、そんなひどいことするんでしょ。

勇也 なんか、外国に追いつこうとしているのにな、ほんな一人のこと見てられへん

力 ほんな一人のために、時間をむだにできひんいうか。

T 病人に対して、いちいち手厚い治療してたら、
お金がへる。お金がもったいない。

T 工場の人にとって一番大事なことは、安い生糸を作ることでしょ。どこで、お金をけずるか
と言えば、原料のまゆで安くすることはできないでしょ。とすれば、どこでお金をけずるの。

C 働いている人のお金

T 賃金とか、そういうところですね。そういうことだから、病気になったからといって、手厚い治療なんかやっつけられないわけですね。

はい、それから、大輔

大輔 なんで、こんなところに、親の人は子どもを出さるの？

T もういっぺん言って。

大輔 なんで、ほんなひどいところに親はだまって子どもを出すの？

哲郎 工場がうまいこと言うて、だましたんちがう。

智士 だまされたん。

真ひ ほんなんやったら、2年目から行かさらへんやん。

C ほうよ。

力 貧乏やでな、ごはんがたべさせられへんでな、工場やったら、ちょっとでもごはんが食べさせられるでな、

T 哲郎が、工場がうまいこと宣伝して、だましたんちがうか、て言いましたね

C それやと思う。

ちがうと思う。それやったら2年目からいかへん。

勇也 いや、てっちゃんのもあると思う。お母さんやはな、はなれてるで、働いているところとか見てへんで。

T そういうこともあったやろね。だけど、真ひとや、暢子はそれはおかしいと言う。

暢子 一応、デマもあったやろうけど、なんか、家が、飛驒やで、ものすごう山奥やで、貧乏やろ。ほんでな、ほれでも、みんな食べるものがないでな、ほれでもみんないかに思う。

真ひ 貧乏やさかい、

T 工場もひどいけど、こっち（飛驒）は、もっと貧しかったんじゃないか、ていってるんですね。だから、これでもがまんして行ったんじゃないか。

力 あのなら、家が貧乏やったらごはん食べられへんやん。ほやけど、なんぼ看病とかしてもらえへんとはいうても、工場へ行ったらごはん食べられるで、ほやさかいに行っただと思う。ほやし、お母さんとかも、食わす分無いさかい。和幸 家族のうち、一人工場へ送ったら、ごはん食べられて、自分らも両方助かる

T ほと、もう、哲郎君のはいいかな。いくら宣伝文句を上手に言っても、実際がひどければ、

あんなのうそだ、て2年目から行かないね。だけど、毎年毎年たくさんの人が行くわけだ。そうすると、デマだけではない。

そうすると、その原因として、このふたつの世界を比べたときに、工場の方が、まだまだだったんじゃないか。

それから、家族みんながそこにいたら、食べていけない。ここへ働きに行ってくれと、どうなるの。

和幸 助かるの。

T ごはんが、こんだけしかない。これを5人で食ったら半年も持たない。一人でも働きに行ってくれたら、

勇也 一人行ったら、一人分ようけ食べられる。

T そういうの、口べらし、ていいますね。食わせてもらえるだけでよかった。

大輔 まだある。なんで男はいかへんの

力 はむかうでちがう。

C 不器用やでとちゃう？

T それは、ヒントはこれ。働きに行った人たちの家はどういうくらしの人たちか。

和幸 あ、わかった。働きざかりの男の人が工場へ行ってしもたら困る。

T こっちは、田んぼを借りて耕す小作の人たちがほとんどだったんですね。

ほうすると、田んぼ仕事のような力仕事は女にはできないでしょ。男がやるね。残った女は、工場へ行く。

力 ぼく、前テレビで見たことあるんやけどな、工場へ働きに行った人は、工場の方が良かったて言うてやるんやて。

T ほう、ほんなことテレビでいわった？

ちょっとこれ見て下さいね。

(OHP資料提示「工女の意識調査」)

工女の人たちは、工場で働いたことをどう思っているか。

食事、まずかったという人はゼロ

仕事、90%の人がつらくない。ということは、それを裏返して言うと、それだけ、家の仕事は厳しかったということですね。

病気ので手当にしても、半数以上の人は良かったといってる。

ーチャイムー

大事なことは、工場の仕事はきびしかつたけど、それ以上にひどい暮らしが飛驒の人々にはあったということですね。それが、工場のあのひどい労働にもがまんして働いたのだということですね。

IV 学習後の考察

1時間では内容が多すぎるという指摘が事前研でもあったが、やはり、予定した通りを全て学習することはできなかった。だが、この1時間で子どもの中に新しいものはいくつか入ったように思う。子どもたちもかなりよく集中して考え、後半では、子どもたちの方から様々な疑問や、それに

対する自分の考えなども活発に出てきたのはよかった。

授業が一定成功したのは、事後研でも出ていたが資料が学習の状況に応じて適切に出せたことだと思う。一応、展開の中のどこで提示するかは考えていたが、できれば実際の子どもの動きに即する形で使って行きたいと思っていた。それが、いくらかできたように思う。生糸の実物・グラフ・VTRなど、いろんな形の資料を準備できたことも授業に変化を生み出す力になったといえる。

しかし、授業記録をおこしてみると、やはり、前半が上滑りになっている。子どもの発言にきちんと即していないで、こちらの教えたい内容に引き込みながら、あわただしく進めている。1時間でまとめたという意識が強過ぎたせいもあるが、これは、私の授業の場合いつも引きずっている問題でもある。

ただ、この学習を進めるために、かなりいろんな資料を読んで私自身新たな発見がたくさんあった。子どもたちが出してくるであろうさまざまな疑問に対しても対応できるだけのものも一応持っていた。そのことが、授業をいくらかこどもに即した形で展開できた原因だと思う。